

## 科学研究費助成事業 研究成果報告書

平成30年6月14日現在

機関番号：12102

研究種目：挑戦的萌芽研究

研究期間：2015～2017

課題番号：15K12855

研究課題名(和文)現代ヨーロッパ文学におけるトラウマと創造性についての総合的研究

研究課題名(英文)Synthetic Studies on Trauma and Creativity in Contemporary European Literature

研究代表者

対馬 美千子(TSUSHIMA, Michiko)

筑波大学・人文社会系・准教授

研究者番号：90312785

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 2,600,000円

研究成果の概要(和文)：現代ヨーロッパ文学においてトラウマ経験がどのように創造性に関わっているかについて、サミュエル・ベケットの作品を軸に様々な視点(小説、演劇、思想)から考察を行った。また海外の研究者を招聘し、ベケットとトラウマについての公開の研究会を開催し、それに加えて海外研究者と同テーマについて意見・情報交換を継続的に行った。これらの研究活動を通して日本を拠点とした世界的ネットワークを発展させることができた。さらにこの成果である英語の論文集、Samuel Beckett and traumaの出版準備を行った。この論文集は2018年7月にManchester University Pressから刊行される。

研究成果の概要(英文)：We analyzed how traumatic experiences are related to creativity in Contemporary European Literature from various angles (novels, theatre, thought), focusing on the works of Samuel Beckett. We invited a researcher from abroad and held a symposium on Beckett and trauma. We also continued to discuss the same theme with researchers in other countries. Through these research activities we could develop the international research network based in Japan. We made preparations for the publication of a collection of essays entitled Samuel Beckett and trauma in order to publicize the result of this research. The collection will be published in July, 2018 from Manchester University Press.

研究分野：人文学

キーワード：トラウマ サミュエル・ベケット 現代ヨーロッパ文学

## 1. 研究開始当初の背景

本研究は、挑戦的萌芽研究「20世紀ヨーロッパ文学におけるトラウマ表象についての総合的研究」(H24～26年度)の延長線上にあり、これまでの研究を継続し発展させるものである。前回の目的は20世紀ヨーロッパ文学におけるトラウマ表象について総合的視点から考察することであった。その成果を雑誌や国際学会で発表し、日本を拠点とした世界的な研究ネットワークを築いてきた。3年という期間内で有意義な研究成果が出せたが、これまでの研究成果を創造性との関連においてさらに発展させ、論文集を出版し成果を海外に提示する必要がある。これらのことを実現するためには、さらに1サイクルの研究期間が必要であった。

挑戦的萌芽研究(H18～20、21～23年度)の成果として平成24年にRodopi社から*Samuel Beckett and Pain*を刊行しており、今回の研究の成果として出版する論文集*Samuel Beckett and trauma*は日本を発信地とする英語の論文集第2集となる。トラウマと文学に関する研究は英語圏において近年、数多く出版されている。本研究では、これらの研究を踏まえた上で、トラウマを表象する文学として重要であるにもかかわらず、トラウマ研究においてこれまであまり注目されることのなかったサミュエル・ベケットの作品を軸に、トラウマと創造性について検討することにした。

## 2. 研究の目的

本研究は、現代ヨーロッパ文学においてトラウマ経験がどのように創造性に関わっているかについて総合的視点から明らかにすることを目的とする。

(1)まず小説、演劇、思想のセクションごとにベケット作品を軸に様々な角度から分析を行う。

小説セクション(田尻):特にトラウマと日常生活の表象という点に焦点を合わせ、ベケットと問題を共有するヨーロッパのモダニズム作家(たとえばヴァージニア・ウルフ)や、日本の敗戦(原爆)をトラウマとして抱えた作家たちを研究する。  
演劇セクション(堀):ベケットの戯曲を中心に、冷戦下の核の想像力にベケットがいかに関わり、核の脅威や人類絶滅に対する文化的トラウマを作品に描写しているかについて考察する。

思想セクション(対馬):トラウマ的経験がいかに創造力や想像力の源泉となるかについてベケット作品の分析を中心に、トラウマと皮膚の結びつきに焦点をあて研究をすすめる。

(2)さらに3セクションの総合的考察の上にならって、現代ヨーロッパ文学におけるトラウマの経験がどのように創造性に関わっているか、そしてその考察にもとづき、破壊的経験を多く抱える現代において、トラウマを創造性に結びつけ社会に活かしていくことがいかに可能であるかを明らかにする。

本研究の学術的な特色は、従来、医学、精神分析の研究対象であったトラウマの問題を、文学に加え、演劇、思想を含む文化創造活動の総合的な視点から考察する点、原爆および震災による津波・原発事故という未曾有の経験をした日本を含めて、様々なカタストロフィ的現実に遭遇し、それら乗り越える可能性を模索する現代社会との関わりにおいて研究を進める点、トラウマ的体験を創造性につなげるダイナミズムの持つ倫理的、政治的意味を考察する点にある。本研究は文学の研究地平のみならず、

演劇、思想の研究地平を上げるとともに、現代社会において着目すべき現象であるトラウマの問題に文化創造の視点から新たな光を投げかけるものである。

### 3. 研究の方法

研究体制は、田尻を中心とする小説セクション、堀を中心とする演劇セクション、対馬を中心とする思想セクションという3つの研究セクションで構成され、全体の統括者は対馬である。研究方法・計画の要旨は以下の通りである。

(1) 平成27年度：以下の作業を中心に進めていく。

研究資料や文献を収集し、その資料整理を行う。

セクションごとにトラウマと創造性の問題について、ベケットの作品を軸に様々な角度から分析を行う。

の考察の成果を発表し、海外共同研究者との意見交換を行うための研究会を開催する。考察の成果を発表するための研究会を外部に開かれたかたちで開催し、外部の参加者との研究の交流の場として考察を深める契機とすると共に、本研究の参加者がベースとしての考察を共有する。

論文集出版の準備を進める。

平成29年度に3年間の研究の成果を論文集 *Samuel Beckett and trauma* の形でまとめ、英語の研究叢書として英語圏の出版社から出版するための準備を行う。

(2) 平成28年度：前年度の研究会を中心とした研究活動の成果をもとに、それぞれのセクションにおける現代ヨーロッパ文学に

おけるトラウマと創造の問題についての問題域を確定する。さらに、文化創造活動である文学と現代社会との関わりを考えながら、現代社会においていかにトラウマを創造性に結びつけ社会に活かしていくことができるのか、またトラウマと創造性についての考察が社会にどのような新しいパースペクティブを与えうるかという問いについて考察する。同時に以下の作業を進める。

研究資料や文献を収集し、その資料をさらに充実させ、資料整理を行う。各セクションでの研究を深めるために、研究資料や文献をさらに充実させ、入手した資料や文献のリストの整理を行う。

前年度に引き続き、セクションごとに現代ヨーロッパ文学におけるトラウマと創造の問題について、ベケットの作品を軸に様々な角度から分析を行い、考察を深める。

国内外の学会で研究成果を発表する。各研究者は、海外共同研究者との意見交換を推し進めながら、国内外の学会で、それまでの研究の成果を発表する。

論文集出版のための編集作業を行う。

(3) 平成29年度：過去2年間の研究活動を通して得られた成果を全体としてまとめあげる。本研究が現代社会に対して提示できるトラウマと創造性の問題についての考察をまとめていく。その延長線上で以下の作業を進める。

前年度に引き続き、セクションごとに現代ヨーロッパ文学におけるトラウマと創造の問題について、ベケットの作品を軸に様々な角度から分析を行い、考察を深める。

論文集を出版する。3年間の研究

の成果を論文集の形でまとめ、研究叢書として英語圏の出版社から出版する。

#### 4. 研究成果

(1) 小説、演劇、思想セクションごとに、現代ヨーロッパ文学におけるトラウマと創造の問題について、ベケットの作品を軸に様々な角度から分析を行った。またその分析結果を学会発表、論文、図書の形で発表した。

小説セクション(田尻)：全体として、トラウマと日常性について考察した。トラウマはもちろん非日常的な出来事が心に与える外傷のことであるが、そのトラウマを抱えて人はどう日常生活を生きるのかという側面に焦点を合わせた。具体的には林京子など原爆体験者の文学における「事後」の日常性の問題、三島由紀夫における終戦のトラウマと戦後の日常性の共存の問題性、イアン・マキューアンの『土曜日』における9.11テロの記憶が日常性に及ぼした影響、ヴァージニア・ウルフ『ダロウェイ夫人』における第一次大戦のトラウマと日常性、ベケット『しあわせな日々』におけるホロコーストの集合的記憶と対照されて浮かび上がる日常の脆弱性の問題、などを考察し、口頭発表や論文としてまとめた。

演劇セクション(堀)：ベケットの演劇において、作者自身の戦争体験や戦後の体験というトラウマ、そして冷戦時代の核の脅威という第一世界の人びとが想像した文化的トラウマがどのように表現されているかを考察した。ことに冷戦時代に書かれた劇作品にはなんらかの大惨事を体験した「人類最後の人間」を描いたものが多く、その深い人間洞察をとおして今日を生きる我われの不安や恐怖をも浮かびあがらせる点に着目した。さら

に戦争直後に書かれた代表作『ゴドーを待ちながら』においては、作者自身の戦中戦後の体験が、いつの時代にも通じる大惨事へのトラウマへと普遍化されているさまを分析し、また冷戦中の西ベルリンで敢えて自身の作品を演出した作家の思いをその演出方法を考察することをとおして探った。

思想セクション(対馬)：これまでベケットの小説『ワット』の分析を通してトラウマと皮膚の表象との関係について探究してきたが、これまでの研究をトラウマと創造力のつながりという観点から再考した。まず、現代のトラウマ理論の動向を探り、現代トラウマ理論とベケット作品の関係について再考した。また、ベケットにおける創造力の問題を想像力の問題に関わるものととらえ、ベケットにおける想像力についての考察を行った。具体的には、ベケットにとっての想像力が、再現や模倣に関わるのではなく、いかに極限状況において「人間と世界の絆」のイメージを生み出すことに関わっているのかについて、ブランショの文学論やドゥルーズの映画論を参照にしながら考察した。さらにそれらの考察を口頭発表や論文としてまとめた。

(2) 各セクションにおいて、トラウマと創造性に関する研究資料や文献を収集し、その資料の整理を行った。

(3) 海外の研究者を招聘し、ベケットとトラウマについての公開の研究会を開催した。また海外の研究者に執筆を依頼し、同テーマの英語の論文集の出版準備を進めた。これらの活動を通して、前回の研究で築いた日本を拠点とした世界的な研究ネットワークを発展させた。

平成28年1月には、Nicholas Johnson氏(Trinity College, Dublin)を招き、青山学院大学で開催された研究会において現代演

劇の視点から、ベケットとトラウマについて  
の話をしてもらい、意見・情報交換を行った。

(4)で説明している英語の論文集の出版準備を通して、執筆者であるイギリス、カナダ、アイルランドの5名の海外研究者と意見・情報交換を継続的に行い、研究ネットワークを発展させた。論文集の執筆者として、本研究に参加した研究者は以下の通りである。

Robert Englestone 氏(University of London, U.K.)

David Houston Jones 氏(University of Exeter, U.K.)

Conor Carville 氏 (University of Reading, U.K.)

Nicholas Johnson 氏(Trinity College, Dublin, Ireland)

Anna Sigg 氏(John Abbott College, Canada)

(4) 研究の成果を英語の論文集 *Samuel Beckett and trauma* として出版するための作業を行った。この論文集は Manchester University Press から2018年7月に刊行される。出版のために定期的に会合を開き、意見交換を行った。また3人で協力し、出版社との交渉、イントロダクションの執筆、編集作業、校正、索引作成などの作業を行った。

## 5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

[雑誌論文](計 2 件)

対馬美千子、ベケットの想像力と「人間と世界の絆」、『論叢現代語・現代文化』、査読有、Vol. 19, 2018, 1-15

対馬美千子、Language and Music in Beckett's Two Radio Plays、『論叢現代語・現代文化』、査読有、Vol. 15, 2015, 89-101

[学会発表](計 8 件)

堀真理子、Beckett Legacies on Caryl Churchill's Late Plays、Samuel Beckett Working Group "Beckett Influencing/Influencing Beckett" Meeting、2017年、Budapest (Hungary)

堀真理子、Samuel Beckett and the Apocalyptic Imagination、Samuel Beckett Summer School、2017年、Trinity College Dublin (Ireland)

対馬美千子、ベケットにおける想像力の可能性をめぐって、日本サミュエル・ベケット研究会、2017年、東京工業大学

堀真理子、Forgetfulness of the Past as Revealed in WAITING FOR GODOT and GODOT HAS COME、International Federation of Theatre Research's annual conference、2016年、ストックホルム大学(スウェーデン)

田尻芳樹、Ian McEwan における記憶、トラウマ、日常性、第88回日本英文学会大会、2016年、京都大学

対馬美千子、"The Skin of Words": Trauma and Skin in *Watt*、日本サミュエル・ベケット研究会、2016年、東京工業大学

田尻芳樹、原爆文学における<トラウマ>、<証言>の問題、日本英文学会関東支部第11回大会、2015年、慶應義塾大学日吉キャンパス

田尻芳樹、三島由紀夫と日常性のトラウマ、国際三島由紀夫シンポジウム、2015年、東京大学駒場キャンパス

[図書](計 7 件)

堀真理子、田尻芳樹、対馬美千子編、*Samuel Beckett and trauma*、Manchester

University Press、2018、216

田尻芳樹、河内恵子他、『現代イギリス小説の「今」』、彩流社、2018、55-79

堀真理子、『改訂を重ねる『ゴドーを待ちながら』』、藤原書店、2017、280

堀真理子、木村正俊他、『文学都市ダブリン』、春風社、2017、251-270

堀真理子、対馬美千子、江藤秀一他、『帝国と文化 シェイクスピアからアントニオ・ネグリまで』、春風社、2016、169-186、419-437

堀真理子、田尻芳樹、対馬美千子、井上善幸、近藤耕人他、『サミュエル・ベケットの遠近法』、未知谷、2016、109 - 127、201-217、285 - 298

堀真理子、伊達直之他、『戦争・詩的想像力・倫理 アイルランド内戦、核戦争、北アイルランド紛争、イラク戦争』、水声社、2016、95-153

## 6 . 研究組織

### (1)研究代表者

対馬 美千子 (TSUSHIMA, Michiko)

筑波大学・人文社会系・准教授

研究者番号：90312785

### (2)研究分担者

堀 真理子 (HORI, Mariko)

青山学院大学・経済学部・教授

研究者番号：50190228

田尻 芳樹 (TAJIRI, Yoshiki)

東京大学・大学院総合文化研究科・教授

研究者番号：20251746